

報告

アコースモニウム演奏による電子音響音楽祭 Festival Futura 2022 参加報告

Report on Festival Futura 2022 for Electroacoustic Music with the Acousmonium

佐藤 亜矢子

Ayako SATO

玉川大学芸術学部

College of the Arts, Tamagawa University

概要

毎年フランスで開催されている Festival Futura が、2022 年 8 月に第 30 回を迎えた。フィクスト・メディアの電子音響音楽を特集し、全作品がアコースモニウムで演奏される Futura は、百近くのスピーカーを使用、百を超える作品がプログラムされ、アコースモニウムを用いる音楽祭として世界最大級の規模を誇る。首都パリから離れた小さな町で、小規模な団体によって 1993 年から継続されている。2022 年は、音楽祭に先立って実施されたアコースモニウム演奏講習会から最終日のオールナイト・コンサートまで、3 年ぶりに規制なく行われた。本稿では、講習生、演奏家、作曲家として Futura 2022 に参加した筆者の視点から、開催地、音響システム、プログラムなど音楽祭の特徴を紹介する。

Festival Futura is one of the largest acousmatic music festivals in the world, with nearly 100 loudspeakers and over 100 works performed with the Acousmonium. Featuring fixed media pieces of electroacoustic music, Festival Futura, which celebrated its 30th edition in August 2022, has been held annually in France from 1993 in a small town far from the capital and organized by a small company. Festival Futura 2022 was held without restrictions for COVID-19, starting with the Acousmonium workshop shortly before the festival to the all-night concert on the final day. This article describes the features of Festival Futura 2022, including the venue, sound system, and program, from the perspective of the author, who participated in the festival as a trainee, performer, and composer.

1. FESTIVAL FUTURA 2022

1.1. 音楽祭について

Festival Futura (以降 Futura) は「アコースマティック音楽、アート、ラジオフォニック、ビデオ」¹のためのフェスティバルで、1993 年からフランスで開催されている。作曲家ドゥニ・デュフル Denis Dufour によって 1996 年に設立された音楽団体 Motus が、団体創設前から主催している。全作品が立体音響装置アコースモニウムを用いて演奏される音楽祭として、世界最大級の規模を誇るといってよいだろう。毎年、南フランスの Drôme ドローム県 Crest クレで行われており²、2022 年は第 30 回記念として 8 月 23 日の前夜祭から 28 日明け方まで、20 を超えるプログラムで 100 以上の電子音響音楽作品ならびに映像作品が上演された。

COVID-19 の影響下にあった 2020、21 年も Futura は開催されたものの、ワクチン・パスの提示や予約必須といった入場規制を設け、例年行ってきた最終日のニュイ・ブランシュ Nuit Blanche (オールナイト・コンサート) を取りやめるなど、音楽祭の規模は縮小された。その後、2022 年に入ってフランスではさまざまな制限が緩和され、第 30 回記念の Futura はフルサイズでの開催が実現した。筆者は 2014 年からほぼ毎年 Futura に参加しており、渡航が困難だった 2020、21 年を経て、今回 3 年ぶりに現地を訪れた。Futura 2022 のスケジュールは以下の通りである。

- 8 月 15 日～19 日 アコースモニウム演奏講習会
- 8 月 23 日夜 オープニング
- 8 月 24 日～27 日 音楽祭本編

¹ Festival Futura 公式ウェブサイト <https://festivalfutura.fr/> (最終アクセス 2022 年 12 月 4 日)

² 1998 年のみ、リヨンとクレで 1 回ずつ行われた。Festival Futura 公式ウェブサイトのアーカイブ・ページ <http://festivalfutura.fr/index2.html> (最終アクセス 2022 年 12 月 4 日)

- ・ 8月27日深夜～28日明け方 ニュイ・ブランシュ (オールナイト・コンサート)
- ・ 8月24、25日 インスタレーション展示



図 1: Festival Futura 2022 のポスター

2. 会場

クレは人口 9000 人に満たない³ 小さなコミュニティである。首都パリからは、高速鉄道 TGV と在来線やバスを乗り継いで 4 時間ほどかかる。ドローム川が流れる自然豊かな地域で、夏の休暇時期は各地から観光客が訪れるものの、大抵はキャンプをするようで、ホテルはほとんどない。繁華街に唯一あったホテルは、2019 年に筆者が利用した際すでに（パンデミックとは関係なく）、まもなく廃業することが決まっていた。当然、都市部のようにコンサート・ホールや文化施設が充実しているとはいえない。Futura 2022 は、オープニングとインスタレーション展示以外は「エスパス・スベラン Espace Soubeyran」という文化施設で行われた。クレの町にある数少ない、そして最大級のイベント・スペースであり、1993 年の Futura から毎年利用されている。2022 年の Futura では、全てのコンサートがエス

³ 2022 年 1 月 1 日時点。クレ市役所の公式ウェブサイト <https://www.mairie-crest.fr/-Presentation-de-la-ville-.html> (最終アクセス 2022 年 12 月 4 日)

パス・スベランの大ホールで、講演が小ホールで行われた。

大ホールは体育館並みの広さがあるが、スピーカーを多数設置するアコースモニウム・コンサートでは座席数は制限される。今回は座席が 70～80 ほど設置され、その一部は通常の椅子の代わりに、クッションが置かれたマットとビーチチェアであった。観客はそれらに寝そべり、リラックスした姿勢で音楽を鑑賞する。また、筆者が参加した 2014～19 年は、コンサートの合間の休憩所として小ホールが活用されており、軽食や飲み物を販売するカウンターがあった。2022 年も、感染対策として飲食が禁止されるようなことはなく、エントランスの外に設置された小屋が飲食ブースとして機能していた。午前中から夜遅くまでいくつも行われるコンサートの間には、それぞれ 30 分程度の休憩が設けられており、観客と作曲家と演奏家とが語らう場と時間として、Futura において重要な役割を担っている。

オープニングは、クレのランドマークである中世の塔 Tour de Crest で、音楽祭本編の前日夜に行われた。筆者が参加した過去 5 回は、エスパス・スベランの中庭で音楽祭初日の昼に行われることが多かったが、今年は第 30 回を記念して会場を移したようだ。Futura 2022 はクレ市（その他に、SACEM、la Maison de la Musique contemporaine、Spedidam）の協力を得て行われており、例年通り、オープニングでクレ市役所の職員による挨拶があった。Futura はクレ市の公式ウェブサイトでも紹介されている。決して愛好家が多いとは言えないジャンルの音楽フェスティバルに小さな町が友好的に荷担する構図は、少なくとも日本ではあまり例がないものだろう。この塔はクレの代表的な観光名所で、過去には Futura のコンサート会場として使われた。

2.1. アコースモニウム

Futura のアコースモニウム・システムは、毎年多少の変更があるものの、基本となる概念やセッティングがあり、おおよそ例年傾向は似通ってくる。今回は、近年プランを作成していた Motus のジョナタン・プラジェ Jonathan Prager の代わりに、オリヴィエ・ラマルシュ Olivier Lamarche が設計を担当した。計画されたスピーカーの数は 96 本だったが、音楽祭本編開始時に 2 本を取り除いた。Motus が所有するスピーカーは古いものが多く、常々メンテナンスしながらコンサートに臨んでいるという。取り除かれた 2 本も、音楽祭本編の前のアコースモニウム演奏講習会の時点で不調をきたしており、修理が叶わずにプランから外されたとみられる。コンソールのフェーダーを上げすぎると音割れを起こしやすいため、講習会ではしばしば、古いスピーカーの扱いに対する注意を促された。このような、いわばヴィンテージ品を用いるのは、団体としての

経済的な問題もさることながら、新品のスピーカーにはないエイジングによる味わいを魅力と捉えていることが理由にあるのだろう。対照的に、例えば Ina-GRM (フランス国立視聴覚研究所、音楽研究グループ) の所有するアークスモニウムは、比較的新品揃いで硬く均質な響きがするという。Futura/Motus では、決して新しくない、使いやすいとはいえないスピーカー (中にはメンバーが自作したものも含む) をも積極的に採用することによって、彼らのアークスモニウムのオリジナリティを形成しているのではないか。

96 (94) 本のスピーカーは3つのコンソールに接続された。複数本を一つのチャンネルにあてた箇所もあり、フェーダーの数とは一致しない。それぞれのコンソールに割り当てられたスピーカーの分類は以下の通りである。

- コンソール1 (図2の青色、左) : 特徴的な周波数帯域をもつ音色スピーカー、左右非対称配置のスピーカー。25チャンネル、36のスピーカー。
- コンソール2 (図2の赤色、中央) : リング状に8本設置された基準のセット (大・中・小3つのリング)。24チャンネル、36のスピーカー。
- コンソール3 (図2の黄色、右) : 特殊な配置のフルレンジ・スピーカー。18チャンネル、24 (うち2撤去) のスピーカー。

それぞれの内容について述べる。

1. 左のコンソール : 1~16ch には音色スピーカー (LFE、ツイーターなど) が割り当てられた。左端から低域~高域と帯域別に並べられたため、操作すべきフェーダーの位置を瞬時に把握しやすい。こうした音色スピーカーは、楽曲中特定の帯域を強調したい箇所でも用いるほか、ポリフォニックな効果をうむためにも使われる。17~24ch に接続されたスピーカーは、コンソールに対して平行ではなく、左や右に傾けた非対称配置となっていた。前後にステレオ2セットずつ合計8本が使用されていたが、演奏時は異なるステレオのペアを左右に用いるなどして、立体感を構築するために活用できた。マスターフェーダーには Bose がステレオで接続された。これらは前方のスクリーンの裏側、コンソールから最も遠い位置に置かれた。

2. 中央のコンソール : 演奏に最も頻用される基準スピーカー群で、1~8ch に大、9~16ch に中、17~24ch に小と、3つのサイズの8ch によるリング状のセットが配置された。大きな8ch は、前方の1~2ch に3本ずつ、サイドから後方の3~8ch には2本ずつのスピーカーが採用された。観客から距離があるために、複数本をセットにしたという。広がりのある遠い音響の演奏表現にこの大きなリングが使われる。中リングは、いずれも一つのチャンネルに1本ずつのスピーカーがあてられた。前方の9~10ch が基本のステレオであり、Futura

の中では比較的大きな JBL が置かれた。演奏中頻繁に使われるものの、経年のためか音割れしやすく、基本スピーカーでありながらも扱いには慎重にならざるを得なかった。サイドの11~14ch にも JBL、後方の15~16ch にはそれよりもやや小さめのフルレンジスピーカーが設置された。これら8ch が演奏時のレファレンスとなるが、一方で音量をあげすぎると空間をブロックしてしまう危険もある。小さなリングでは、前方17~18ch にコンパクトサイズの JBL を2本ずつ、サイドから後方19~24ch はそれ以上に小さなサイズのスピーカーを1本ずつ使用した。観客からごく近い位置に設置され、少しの音量でかなりのインパクトを与えるため、常時鳴らすのは避け、楽曲中の必要な箇所で一時的に使用するなど気を配る必要があった。

3. 右のコンソール : ユニークな配置で、空間における特別な効果を創造する際に使用された。例えば3~4ch はコンソールのすぐ前、高い位置から観客を見下ろすようにして外側に向けて設置され、音が上方から降り注ぐような効果をもたらした。当初は古いスピーカーを2本ずつ予定していたものの、うち2本のメンテナンスが叶わず、音楽祭本編では1本ずつとなった。11~14ch は左右を前方と後方に対角で用いており、独特な空間作りが可能であった。15~18ch は前方と後方の中央に置かれた。これらはステレオではなくモノで使用されており、フランス人作曲家の作品にたびたび聞かれる人物の独話部分などで印象的に活用された。このコンソールでは、うち6本 (9~10、13~14、17~18ch) で1.2.になかった GENELEC を用いており、音の輪郭を明瞭にする助けとなった。

二つの手で百近くのスピーカー、70ほどのフェーダーを操るわけだが、機能別に配置されていることにより、必要なチャンネルを見つけやすく、効率的に演奏を行えるようになっている。アークスモニウムのスピーカー配置やコンソール上のチャンネルの配列には、会場ごと、コンサートごと、団体ごとに特色が見られるが、創造性に富みながらも機能性に優れた配置が Motus/Futura のスタイルなのだろう。

3. アークスモニウム演奏講習会

Futura では例年、音楽祭と同じ会場でアークスモニウム演奏の講習会を実施している。音楽祭本編とほぼ同じ規模のアークスモニウムに実際に触れながら、専門家とともに学ぶことのできる貴重な機会、フランス国内外から講習生が集まる。Futura 2022 では、音楽祭本編が始まる前、8月15日~19日の5日間行われた。講師は Motus のメンバーであるラマルシュ、ナタナエル・ラボワソン Nathanaëlle Raboisson、檜垣智也の3名が担当した。

筆者は2014、15年に受講経験があったため、今回

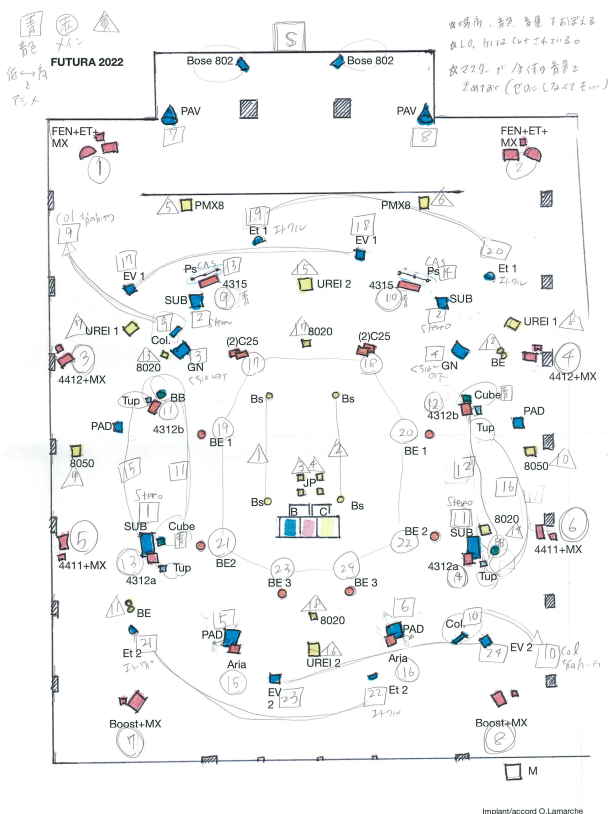


図 2: Futura 2022 のアコースモニウム配置図。メモは筆者による

設定された3つのレベルのうち、上級のクラスに参加した。申し込み時には、レベルごとに指定された問いに対するモチベーション・レターを提出する必要があり、意欲あふれる参加者が揃うことになる。2022年の講習生はイタリア人3名、フランス人3名（以上6名中級クラス）、台湾人1名、日本人1名（以上2名上級クラス）の合計8名で、全員がアコースモニウムでの演奏経験か講習会受講経験があった（初級クラスは開設されなかった）。詳しい年齢は不明だが、30歳前後から50代くらいとみられた。音楽学校で電子音響音楽の作曲を学んでいる学生や卒業生、すでに音楽祭から作品委嘱をされるほどのキャリアのある作曲家など、音楽の専門家が多いものの、興味深いことに、まったく音楽を学んだことがなく、音楽とは関係のない職業についている講習生もいた。彼はクレ近隣に住んでおり、以前から観客としてFuturaに来場していた。楽譜なしに音楽を演奏できることの喜びを感じ、前年から講習を受講しているという。このような動機をもった参加は、主催者にとっても嬉しい反応であろう。電子音響音楽やアコースモニウムは、一部の限定された専門家だけのものではない。日本で活動する筆者にとっても、幅広い層を取り込み、文化の裾野を広げるため

にすべきことがあると感じた。

講習は、毎朝10時から昼食休憩を挟んで17時前後まで行われた。また、講習が始まる前の朝2時間ほどと、講習後23時頃までの数時間は、大小二つのホールを使って講習生の自主練習にあてられた。それぞれ一人30分~1時間のスロットで練習でき、講師が立ち会って助言を与えることもあり、集中的に特訓できるプログラムとなっていた。

講習では、コンソールを操作する技術以上に楽曲分析に重点が置かれ、特に中級クラスでは実践と同じくらい分析に時間が割かれた。一人の講師に講習生2~3人ずつという少人数制のカリキュラムのため、各自が演奏する楽曲について時間をかけて向き合うことになる。講師から提示された課題曲（中級クラスは一人一曲、上級クラスは一人2~3曲）と、講習生自らが選曲した自由曲（一人一曲）について、事前の入念な予習が必須となる。分析の授業では、まず全員で作品を聴き、講習生が楽曲分析を説明し、その後講師や他の講習生と議論を重ね、楽曲の理解を深めてゆく。アコースマティック作品には一般的な「楽譜」がないため、楽曲分析においては主に聴覚に頼ることとなる。また、しばしばデジタル・オーディオ・ワークステーションやオーディオ編集のソフトウェアを用いて可視化した波形を参照する。自身の耳で聞きながら、文字や記号や絵を用いて、作品の全体像と細かな部分を明らかにしてゆく作業である。分析のポイントとして講師から伝えられた手順は、まず楽曲の形式・構成を明確にすること。これはエクリチュールの違いで判断すべきとされる（たとえば集積 accumulation、並置 enchaînement など）。続いて、それぞれの部分を複数のパラメータごとに分析すること。分析において検討するパラメータは①強弱、②音色（周波数の偏り）、③地理的配置（LR）、④距離、⑤密度、⑥速度である。Futuraが講習会を長年行う中で形成されたセオリーだという。こうして、作曲家が企図した表現の解釈を進め、どのように演奏するか計画してゆく。計画に基づき、実践の授業では大ホールのアコースモニウムを使って演奏を行った。個々の演奏を全員で聞き、講師が表現について質問や助言をし、他の講習生からの意見も受けながら、演奏の質を磨き上げてゆく。計画通りにフェーダーを操作したところで、容易に理想的な表現をつくることはできない。ピアノやヴァイオリンと同じく、アコースモニウムが「楽器」であることを改めて実感させられる。フェーダー操作を記録し、その動きを自動化することはできよう。しかし人間の手によってその都度「演奏」することに意義を見出すアコースモニウムにおいて、自動化は理念の対極にあるものといえそうだ。

上級クラスでは、大ホールに設置するアコースモニウムのプランを設計する授業があった。Motusの所有する多種多様な性格をもったスピーカーをどのように

の動向や情報に目を配り、Motus のコンサート・プログラムに取り入れたい作品を常日頃からサーチしているという。筆者もそうしてロブフから「この作品をコンサートで演奏したい」と声をかけられた経験が多々あり、Futura 2022 でも同様であった。演奏する側にとっては、毎年何十曲もの新しい作品に取り組みねばならないことは重荷ではあろうが、こうして彼らのレパートリーを積み重ねていくようだ。

Futura で演奏されるのはフィクスト・メディア作品に限定されるため、NYCEMF や SICMF といった国際的な電子音響音楽祭、あるいは ICMC や SMC などコンピュータ音楽系の国際学会のように、ミクストやライブ・エレクトロニクスなども含めた総合的な電子音響音楽の実践における当世の傾向や流行、あるいは次なる兆候を窺い知ることのできる場とはならない。むしろ、フランスのミュージック・コンクレートの系譜を継ぐ流れの内側にたった視点から、新作を中心に古典も参照しながら、幅広い時代の、そしてフランスにとどまらないアコースティック音楽の趨勢を俯瞰できる音楽祭といえようか。何よりアコースモニウムの「演奏」のためのコンサートである。このシステムを用いることによるフィクスト・メディア作品の演奏表現の魅力や可能性を提示する、祝祭の場として位置づけられると考えたい。



図 6: コンサートの様子 (2022 年 8 月 27 日筆者撮影)

4.2. 講演

音楽祭初日の 24 日と最終日 27 日には、小ホールにて二つの講演が行われた。公開ミーティング Rencontre public と題された入場無料のイベントで、講演者は 24 日がデュフル、27 日はシオンだった。学会で行われる研究発表のような形態と異なり、両者ともスライドや音源資料を一切使用せず、終始トークのみに徹したことが印象深い。手元に多少の資料は用意してあったは

ずだが、ほとんどそれらに目を落とすことなく、Futura 2022 で演奏された自身の作品について、制作の概念やプロセスなどを語った。その後、質疑応答も活況を呈し、講演時間は 1 時間半を超えるほどであった。

4.3. 子供のためのコンサート

25 日午前中には、4~12 歳の子供を対象にしたコンサートが入場無料で行われ、近隣の住民か観光客とも思しき親子が 4~50 名ほど集まった。まずはアコースモニウムについてのイントロダクションとして、前後左右のスピーカーから音を出しながら、ラボワソンによるレクチャーが行われた。子供たちは音の鳴った方向を指さしたり、「こっち!」と声をあげたり、音の動きに反応した。その後、4 作品が演奏された。以下がそのプログラムである。

- Jonathan Prager - The Koala's song (2000)
- Pierre Henry - Intérieur / Extérieur: 1. La terre (1997)
- Alain Savouret - La conférence illustrée et égarée du Professeur Coustique (1977)
- Javier Alvarez - Mambo à la Bracque (1990)

このうち 3 曲は 3~4 分の小品であった一方、Savouret 作品は 10 分を超えており、コンサートでは抜粋が演奏された。1 時間以上の作品も含まれるような Futura 本編と比較すれば、いずれの作品もごく短いものであるとはいえ、楽曲の中身としては決して「子供向け」ではない。尺が短いために展開が早かったり、定位が特徴的で方向を追いやすい音が多用されていたりと、子供たちやあまりアコースティック音楽に馴染みのない親たちの心をキャッチし得る選曲ではあったものの、通常の Futura のプログラムに加わっていても違和感はない。幼少期から、決して子供騙しでない現代音楽に触れられる機会は重要である。演奏中、コンソールの周りに集まってラボワソンの手元に注目したり、立ち上がって身体を動かしたり、椅子に座ってじっくり耳を傾けたりするなど、子供たちが思い思いに楽しんでいる様子が見られた。大学で教育に従事する筆者にとっても、学びの多いコンサートであった。

5. NUIT BLANCHE (オールナイト・コンサート)

8 月 27 日、音楽祭本編最後のコンサートを終えて日付が変わる頃、3 年ぶりとなるニューイ・ブランシュが始まった。演奏家も聴衆も音楽祭本編より幾分リラックスして臨む、明け方まで続くオールナイト・コンサートである。主に Motus メンバーが演奏にあたるのが通例だったが、Futura 2022 では外部から筆者を含む 7 名が招かれ、26 曲を演奏した。ゲスト演奏家は、それ

ぞれ時期は違えど Futura での講習会を受講した経験のある作曲家たちである。セッションは一人1時間ほどで、各演奏家が2~4曲を担当した。芸術監督のロブフからの提案で、ゲスト演奏家が自身の演奏するプログラムの一部あるいは全部の選曲に関われることとなり、筆者も自身の演奏する全3曲を選定した。長めの楽曲が好ましいが、一部短い楽曲があっても良い、攻撃的な音楽は避ける(例として、クセナキスの《Bohor》が挙げられた)など、ロブフからは選曲にあたっていくつかの助言が与えられた。ニュー・ブランシュは午前0時頃から翌朝8時頃までのコンサートである。覚醒と睡眠の合間に夢現で音楽に触れる聴衆のために、筆者はペイザージュ・ソノールの作品をロブフに提案した。眠らずに鑑賞に集中する観客もいるものの、一方音楽を睡眠のお供にする観客も来場する。ニュー・ブランシュは入場無料であり、音楽祭本編とはまた違った客層も Futura に訪れる。クレ近隣に来訪するキャンパーらのコミュニティでニュー・ブランシュの情報が共有されており、寝床を求めるキャンパーらが音楽を楽しみながら眠るために来場するのが恒例らしい。音楽祭本編が終わり、ニュー・ブランシュが始まる前には、観客用の椅子の半分が大ホールから撤去され、寝袋のためのスペースが確保される。持参した寝袋やマットを敷いたり、音楽祭本編から設置されていたビーチチェアに寝そべったりと、人々は寛いだ姿勢で夜を過ごす。入場無料であることが大きな要因であるとはいえ、休暇の観光客を現代音楽鑑賞の場に取り込むことに成功しており、非常に意義深い。



図7: ニュー・ブランシュ終了直後の会場(2022年8月28日筆者撮影)

6. インスタレーション展示

音楽祭本編とは別の会場で、会期中の二日間、インスタレーション作品が展示された。人数を制限したうえで1日2度のみ鑑賞の回があり、早々に予約が満席となっていたため、筆者は入場することが叶わなかった。詳細についての言及は割愛する。過去の Futura

でも、サウンド・インスタレーション作品の展示や、サウンド・ウォークなどといった、コンサート以外の作品を鑑賞・体験する機会も提供されてきた。

7. まとめ

世界中のさまざまな音楽イベントがオンラインで開催されることが標準となっていた2年間にも Futura は現地開催を断念せず、おそらく数多の困難を乗り越えて、2022年に第30回を迎えた。会場に足を運んで音楽を体感する経験そのものや演奏の一回性という価値に加え、場に集う人々との直接的な交流も含めて、「対面」イベントの意義を実感せざるを得なかった。また、フィクスト・メディア作品における「ライブ」の魅力を再発見させられる機会であった。

最後に、数多く存在する音楽祭の中での Futura の特徴を改めてまとめる。全作品がアコースモニウムによって演奏されるフィクスト・メディア作品のための音楽祭である、大都市から決して交通の便が良いとはいえない小さな町で開催される、小さな団体が運営しながらも、演奏される作品数やコンサートの数としては大規模である、そして、新陳代謝しながら30年近くの間毎年開催を継続している、といったところか。日本においても、武生国際音楽祭やセイジ・オザワ松本フェスティバル(旧サイトウ・キネン・フェスティバル)のような地方で行われる国際音楽祭はあるものの、ジャンルはクラシックが中心であり、そもそも開催地は人口9000人に満たないクレとは比較しようもない。フィクスト・メディア作品に限らない電子音響音楽祭としては、ニューヨークで開催されるNYCEMFや韓国のSICMFなどがあるが、集客のしやすい大都市で行われる。ほとんどの上演作品が公募によるもので、応募者や入選者が支払う登録費によって成り立っており、Futuraとは性格の違いがある。Futuraも作品公募を行うことがあったが、少なくとも筆者が入選した数回は、入選者からの参加費の徴収は発生していない。何よりもアコースマティック音楽という、現代音楽の中でも大方の聴衆にとっては無名なジャンルに特化した音楽祭である。アコースモニウム演奏による音楽祭は、たとえばフランス、モンペリエの maison des arts sonores による KLANG! électroacoustique festival、ベルギーの Musiques & Recherches による L'espace du son など、欧州中心に行われているが、コンサートのプログラム数、作曲家数、作品数においても Futura はこれらを上回る。不便で観光名所も少ない地に、一体誰が電子音響音楽を聞きにくるのかと案ずるも、その心配は杞憂で、地域住民や休暇で訪れる観光客にもアプローチできている。アコースモニウムやそれに関わる文化の可能性を示唆するものである。一方、開催地を変更しない限り、これ以上の観客数を見込むことは

難しいのではないかとも思われる。クレの人口は少なく、遠方からの来訪者のための宿泊施設も少ない。これまで多くの Futura 来場者が利用していたホテルが廃業したために、筆者を含む Futura 2022 参加者は民泊やキャンプ場に宿泊した。大都市に在住する一般の音楽愛好家が気軽に来場することは易しくない。とはいえ、少人数で運営する音楽祭であり、これ以上に規模を拡張し観客数を増加させると対応しきれず、多少の不便さによって参加者数を抑えている現在の状況が Motus にとっては適当であるのかもしれない。いずれにせよ独自性を持った類稀な音楽祭であり、今後も末長く継続されることを強く望む。

8. 謝辞

本稿執筆にあたっては、Motus メンバーであり、Futura 2022 講習会講師、演奏家である檜垣智也氏とナタナエル・ラボワソン氏にご協力いただいた。音楽祭の写真やアークスモニウム・プラン画像の掲載については、芸術監督のヴァンサン・ロブフ氏に快諾いただいた。また、Futura 2022 での調査研究は、公益財団法人野村財団 2021 年度下期芸術文化助成によって実現したものである。ここに感謝の意を表します。

NOMURA 野村財団

9. 著者プロフィール

佐藤 亜矢子 (Ayako SATO)

作曲家。主に電子音響音楽の領域で活動。ICMC、SMC、NYCEMF、Festival Futura 他、国内外の音楽祭や国際学会で作品を発表。デステロス・コンペティション、プレスク・リヤン賞他受賞多数。2019 年東京藝術大学大学院博士後期課程修了。作曲家リュック・フェラーリの作品研究で博士（学術）。現在、玉川大学、大阪芸術大学、尚美ミュージックカレッジ非常勤講師、パリ第 8 大学客員研究員。<https://asiajaco.com>



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂るか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。